

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 棚橋 由賀里

【所属】 (助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

17世紀モロッコにおけるスーフィー教団の権威の源泉

【研究の目的】 (400字程度)

モロッコは、16世紀から現代に至るまで、シャリーフ（イスラームの預言者ムハンマドの子孫）の王朝であるサアド朝（16世紀初頭～1659年）およびアラウィー朝（1631年～現在）が支配してきた。そのため、モロッコ研究者の間では、支配者の求心力における血統の重要性が自明視されてきた。

しかしこの2つの王朝の移行期に、モロッコを統一しかけた非シャリーフ勢力がいた。それがディラーイー教団という名のスーフィー教団である。ディラーイー教団の指導者はシャリーフ家系ではないにもかかわらず、衰退途上のサアド朝および新興のアラウィー朝と争って1651年には王位を宣言し、ヨーロッパ諸国と外交関係を結ぶまでになった。1668年にアラウィー朝に滅ぼされるまでの短期間ではあるが、モロッコ北部の大部分を支配したのである。本研究は、シャリーフの地位に依らずして、ディラーイー教団がどのようにこれほどの権力を獲得したのかを明らかにし、モロッコにおける宗教的権威と政治的権威の関係に新たな光を投げかけることを目指すものである。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

ディラーイー教団は、機能不全を起こしたサアド朝に代わり、17世紀初頭以降の中アトラス山地において、救貧活動や争いの調停を通じて行政の補完機能を獲得していった。また、同地に大規模な教育・研究施設を建設し、モロッコ全土から知識人を集めたことでも知られている。このような勢力や施設のハード面に着目した先行研究に対し、本研究ではソフト面、つまり教団関係者などの思想や言説の内容に着目する。

当初の研究計画としては、文献研究を通じて、ディラーイー教団のスーフィーたちが、①自らの霊的・政治的権威をどのように認識・宣伝していたのか、②同時代の教団外部の人々は①をどのように受け止めていたか、の2点から考察を進め、①②の分析・比較を通じ、当時のモロッコにおいて、スーフィー教団がシャリーフと競合する権威を獲得した論理を明らかにしようとしていた。

2024年2月20日～3月10日にかけて、モロッコへ渡航し、モロッコ王国国立図書館（ラバト）、モロッコ王立ハサニーヤ図書館（ラバト）、ナースィリーヤ図書館（タムグルート）で、各図書館が収蔵する写本資料の調査をおこなった。その結果、ディラーイー教団に関する未発見の写本資料2点を発見した。

1点目は、サアド朝末期の資料で、ディラーイー教団の指導者と、サアド朝やその他の反乱勢力との書簡集である。2点目は、アラウィー朝に書かれた資料で、アラウィー朝に敗北したディラーイー教団の人々を悼む詩である。それぞれ考察ポイント①②に対応すると考え、内容の解読と分析を進めている。

書簡集の分析からは、ディラーイー教団はサアド朝やその他反乱勢力と、状況に応じて合従連衡していた様子が窺えた。詩の分析はまだ着手したばかりだが、アラウィー朝の治世になってもなお、彼らを悼み慕うスーフィーや知識人がいることがわかる。

【結論・考察】 (400字程度)

書簡のやりとりを分析する限りでは、ディラーイー教団の指導者たちは自らの霊的権威を誇示する様子がない。あくまで一地方勢力の長（＝世俗的権威の持ち主）として、他の同盟相手や敵対勢力と、資金や軍事力の援助に関する交渉をおこなっているように見える。このため、この資料の分析に関しては、世俗的権威として

の宣伝・自己演出の観点から考察を進めていく。加えて、新発見の書簡資料に基づく他勢力との同盟・敵対関係の移り変わりというハード面の研究にも展望が持てる。詩に関しては、今後分析を進めていくことになる。この資料におけるディラーイー教団員を讃え悼む内容と、すでに刊本化されている伝記集におけるディラーイー教団員の伝記の記述の内容を比較しながら、シャリーフの血統なしに勢力を拡大した彼らが当時の社会でどのように受け止められていたのかを明らかにしていきたい。